



日本と中米を結ぶ国際共同防災研究に挑む

中野 元太さん 京都府宇治市 京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 准教授

Genta Nakano

「エルサルバドルの人たちは『もう危ないから逃げようぜ』って自分たちで主体的に動ける。

これって、実は日本の方が遅れをとっている部分なんです」

JICA海外協力隊(JOCV)でエルサルバドルの防災活動に従事した中野元太さんは、7歳の時に阪神・淡路大震災を経験し、地元高校唯一の防災科で震災のリアルを学んだ。現在は、環太平洋の命を守る架け橋として、国際科学技術協力プロジェクト(SATREPS)の日本側リーダーを務める。国境を越えたプロジェクトを率いるようになって、常に現地の人々と同じ目線で汗を流し続ける理由。その原点は「JOCVは二人三脚」というJOCV時代の現場経験にあった。

中野さんの現在地

国際共同プロジェクトの
リーダーとして

SATREPSでは、地球物理学・工学・社会科学の知見を融合させた国際科学技術協力プロジェクトを進めている。京

都大学防災研究所の准教授でもある中野さんは、ここで中米太平洋沿岸部における複合災害リスク軽減に向けた総合研究を牽引。日本、メキシコ、エルサルバドルから70～80名もの研究者が集結する巨大な取り組みだ。

特に焦点を当てているのが、港における複合災害のリスクだ。対象地域であるメキシコのマンサニョー港は、日本の自動車メーカーが多くの部品を輸入する一大拠点だが、防災の観点から見ると極めて脆弱だった。

「初めて訪れたとき、巨大な港なのに防波堤などの設備がほとんどないことに驚きました。石油ターミナルやコンテナヤードのすぐ目の前に、観光地のホテル街が広がっている状態だったんです」

もしここで巨大津波が発生すれば、港湾機能が停止するだけでなく、観光客や住民の命が危険にさらされることに

なる。理系・工学系の研究者が「どんな津波が来て、どこまで浸水するか」を科学的に予測する一方で、そのデータを基に「どう住民を逃がすか」という計画を現地の人々と形にすることが中野さんの役割だ。

現在は3ヶ月に一度のペースで現地へ行き、防波堤の設置場所といった工学的な検討から有事のマネジメント計画の策定、現地コミュニティを巻き込んだ避難ルートのディスカッションまで、幅広



SATREPSでは港湾を訪問し防災対策について検討している



JOCV活動中は日本文化紹介にも積極的に取り組んだ



JOCV時代の配属先であるサン・ペドロ・マサウア市役所危機管理課のメンバーと（右端が中野さん）



SATREPSにてエルサルバドルの地域コミュニティでの津波避難計画の策定も進める

い活動に精力的に取り組んでいる。

JOCV時代

一步を踏み出す勇気と調整力

高校時代から防災を専門にしていた中野さんが、国際的な防災研究に身を投じる転機となったのが、2011年3月11日、日本を襲った東日本大震災だった。

当時エルサルバドルで、まさに住民とともに洪水対策のワークショップを重ねていた中野さん。「朝起きてニュースを見て、日本が大変なことになっていると知りました」中米の太平洋沿岸でも2～3メートルの津波アラートが出たため、すぐに市長や市役所職員、市議会議員らを集めて対応を呼びかけた。しかし、地域を回っても住民は誰も逃げようとしなかった。「彼らにとって津波はただの高波という認識だったんです。『2～3メートルなんて大したことない』と言い合っているうちに、津波の到達予測時間が過ぎていました」

幸いにも、この時は数十センチの潮位変化で被害はなかったが、翌日の新聞で、海辺で津波を眺めるレスキュー

隊員の写真を見つけて衝撃を受ける。「津波の時に海に行くのは大きな間違い。ましてレスキュー隊員が率先して行つては絶対にダメ」津波の脅威や、命を守る避難のあり方をどうすれば理解してもらえるのか、当時痛感したことが現在の研究のバックボーンになっている。住民と同じ目線で汗を流すJOCVだったからこそ、現地における防災教育の難しさを誰よりも深く感じる事ができたのかもしれない。

未来へのビジョン

一步を踏み出す勇気と調整力

こうした経験があったからこそ、中野さんは、自発的な気づきを促すための「可視化」に力を注いでいる。

例えば、現地の学校での津波避難訓練では、津波浸水シミュレーションのために映像を使う。「避難開始を5分遅らせると、子どもたちがこの道で津波に捕まってしまう」という状況を先生たちにビジュアルで共有すると、危機意識が劇的に変わっていくという。

「外部の専門家がやってきて『こうし

中野 元太さん プロフィール

京都大学防災研究所准教授。阪神・淡路大震災の経験を原点に、JICA海外協力隊（エルサルバドル・防災職種）などを経て現職。専門は防災教育、地域防災計画。現在は国際共同プロジェクト「SATREPS」の日本側リーダーを務める。

なさい』と押し付けても意味がない。一緒に考えることで、先生たちが自分ごととして捉えてくれる。それこそが最も重要です」中野さんのビジョンは、日本が海外を一方的に支援することではなく、国境を越えて「相互に学び合う」関係を築くことなのだ。

こうした中、日本が学ぶべきことも多いという。「エルサルバドルでは、普通の住民たちが、非常時になるとオレンジ色のジャケットを着て主体的に防災グループとして機能します。一方で、日本は行政へ依存しがちで、警報が出ないと動かないなど、住民の主体性が停滞しやすい側面があります」

科学の最先端に身を置きながらも、中野さんが何より大切にしているのは、常に地域住民のコミュニティに寄り添い、共に歩む目線なのだ。

中野さんへのエール！

JICAペルー事務所長
細川 幸成さん



今後も目が離せない存在

最初に会ったのは大学生の時で、その時から落ち着いた雰囲気の中にも熱い思いを感じさせる青年でした。その後、防災の分野でJOCVから研究者へとキャリアを積み上げ、常に私の想定を上回る活躍をされています。何度も一緒に仕事をできたのはとてもラッキーであり心強く感じます。日本だけでなく世界の防災をけん引する存在になってほしいと期待しています。